

あらゆる知を融合しマネジメントを科学する。

学域を超えて新たなコミュニケーション理論を見だし、
“よりよいマネジメント”を構築して現代社会の課題に挑む。

現代社会では、コミュニケーション形態の急速な変化により従来のマネジメントでは対応できない状況が生まれています。本研究では新しいコミュニケーション形態を「トポロジカル・コミュニケーション・アクティビティズ」と名づけ、理論を確立しようとしします。目指すのは、DEI&Bの推進による多様な人材が活躍できる社会の創出。よりよいマネジメントと多様性の推進は相互に作用し、各コミュニティの発展につながるはずです。

研究代表者

福山公博

FUKUYAMA Kimihiro

立命館アジア太平洋大学
国際経営学部 准教授

「常識の枠にとらわれない研究で、すべての人が活躍できるコミュニティをつくることに貢献したいですね」

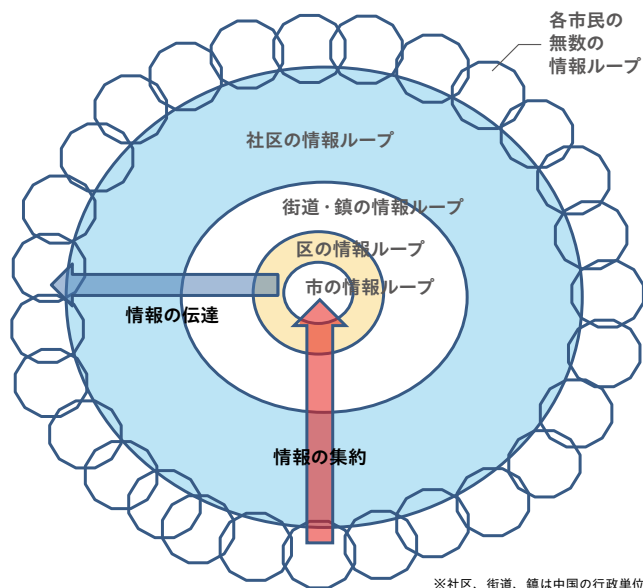
新規性・独自性

領域を超え、実務と理論を融合した、革新的なマネジメント研究。

本研究の特徴は、独自のコミュニケーション理論を通じて革新的なマネジメントを探究することであり、従来の学術的枠組みを超えた多面的・融合的アプローチで、それに挑みます。例えば、①多様な学問領域から文理の垣根を越えた学際的な知の融合を図る。②AI、メタバース、量子コンピューターといった最新技術によるコミュニケーションの急激で大きな変化も研究範囲とする。③「Think Globally, Act Locally」の姿勢で、地域の課題や中堅中小企業の問題に世界的視野と先端技術を活用して実践的に取り組み、イノベーションを目指す。こうした研究姿勢には、研究代表者が長く国際金融実務を通じ、さまざまな国、民族、人種、宗教をバックグラウンドとしたマネジメント、新規事業創成に携わったことが大きく影響しています。研究対象は領域を限定せず、“新たなコミュニケーションによって、よりよいマネジメント、意思決定、戦略策定を探究する”ことのできる場であれば、どこでも本研究の対象となります。

「中国上海市におけるロックダウンの際の新型コロナウイルス感染症対策政策情報のコミュニケーションにかかる考察」において、研究代表者が考案した概念。中国ではTCCAC形態をとった情報のやりとりが非常に迅速かつ短いサイクルで何度も回転して情報のフィードバックが多数行われたことが、徹底したゼロコロナ政策を13億の人口に対して推し進める原動力となった。(右図)

新しいコミュニケーション形態
「トポロジカル・コミュニティ・コミュニケーション
活動サイクル (TCCAC)」の概念図



社会連携に向けて

地域に根ざしたグローバル展開の実現。

本研究では、特に大分県や九州・沖縄の企業との連携を重視しています。日本国内だけのビジネスに限界を感じている企業も、異なる価値観や人材との出会いによって課題解決や新たな展開を計ることが可能です。これまで、本学から外国人留学生インターンを受け入れ、新たな視点からの課題発見・解決を実現した企業や、外国人採用をきつ

けに海外合弁会社設立に至った企業の事例などがあります。今後さらに地場企業やスタートアップとの連携を、国際展開支援や外国人材活用などを通じて深めます。また、経済産業省九州経済産業局や各県の商工労働部など「官」との連携や、九州工業大学など「学」との共同研究も始まっており、今後広げ深めることを目指します。

